

今日は、北九州市立文学館が令和二年度に募集した第十一回「あなたに
あいたくて生まれてきた詩」コンクールの受賞作品の中から、京都市の
小学六年生の『せつちやくざいご』という詩を紹介します。

『せつちやくざいご』

「いめん…いめんね」
そう言いたいだけなのに
口がせつちやくざいで
ひつつけられたみたいに
開かなかった

目の前には
みけんにしわをよせて
うちがなげたボールが
あたってしまった
額をさわる友達
うちが

なげたボールは
バッチンて
すごい音をたてて
友達に
あたってしまった

思い返すと
強くなげてしまった
うちが悪い…
うちが悪いんだ

そう思った時

せつちやくざいが

やわらかくなって

とけた…ような気がした

「つっきはあてごめん」

友達は ゆるしてくれた

「別に 554」

せつちやくざいが

二つの心をつなげてくれた

いかがでしたか。

自分の投げたボールが、友達の額に、すごい音を立てて当たってしまった。目の前には、みけんにしわを寄せて、痛そうにしている友達の姿が…。心の中では「いめん」と思っているのに、その言葉をすぐに口にできなかつた理由を、作者は「口が接着剤で引っ付けられたみたいに」と表現しています。この時、「接着剤」となったのは、作者の動揺や困惑だったのかもかもしれませんね。

でも、作者はすぐに自分のしたことを思い返してみました。そして、ボールを強く投げてしまった「うちが悪い」と、素直に認めることができたのです。

もし、作者が「そんなつもりはなかったのに」とか「わざとじゃなかったのに」などと自分のことだけを考えていたら、恐らく出てこなかった思いではないでしょうか。相手の立場になって、自分の行為を振り返ってみたらこそ、自分が悪かったと思えたような気がします。

そして、「この気づきが、「いめん」という言葉を言えなくしていた「接着剤」を、やわらかくして溶かしてくれたんですね。

詩の最後にある、今度は二人の心をつなげてくれた「接着剤」。それは、相手の立場に立って考える「思いやりの心」ではないでしょうか。それは、では、また。